

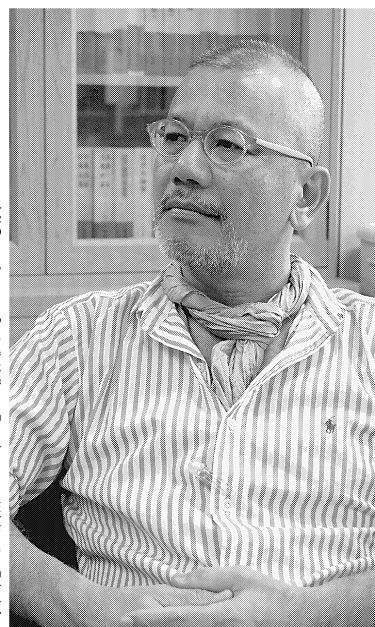
文 化

安全保障節目の年に 安

これからの50年に向けて

今回は最終回。我部政明・琉球大教授(国際政治)とジャーナリストの松尾文夫さんが、沖縄基地問題と安全保障の今後について語り合った。基地の島に住みながら安保を論じてきた我部教授と、米国の取材歴が長い松尾さんの認識には、ずれがある。しかも、それぞれに理がある。そこが明確になったこと自体に、これからの沖縄と安保を考えるヒントがある。
【構成・撮影、鈴木英生】

我部政明・琉球大教授



がべ・まさあき 1955年生まれ。慶応大大学院博士課程単位取得退学。著書は『戦後日米関係と安全保障』『沖縄返還とは何だったのか』など。

松尾文夫さん 私は1945年

7月、福井市でB29の無差別爆撃を生き延びたことから、戦後も人並み以上に米国を意識してジャーナリストになり、64・69年に米国で沖縄返還交渉などを取材しました。72年に東京からバンコクへ赴任する際は、あえて復帰直後の沖縄を経由しました。このとき那覇で、地元紙の人に琉球処分の芝居を見せられました。米軍基地を残したままの沖縄返還を、明治政府による琉球王国の武力併合になぞらえたのでしょう。こうした取材経験から、日米安保が沖縄に基地の苦悩を押しつけてきた現実、県外の人間としては人一倍知っているつもりです。しかし同時に、この50年は、日本が大規模な再軍備抜きで経済成長を遂げられた成功物語だったと思います。70年代の米中和解では、当時のニクソン米大統領が中国に「日米安保が日本の再軍事大国化を防いでいる」との論理を受け入れさせた。以来、安保と沖縄の基地は東アジアのいわば安定剤になっている。

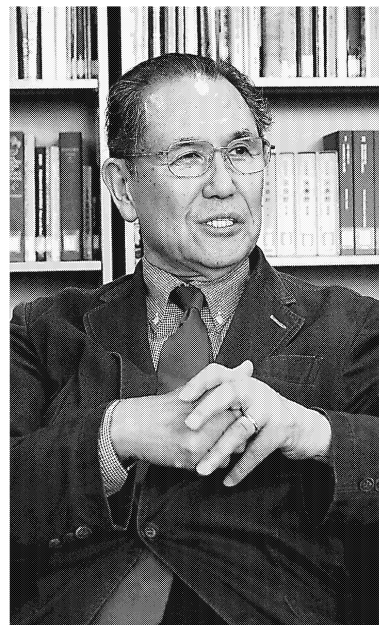
我部政明さん 米海兵隊普天間飛行場の移設問題については、どうお考えですか？
松尾さん 皮肉なことに鳩山由紀夫前首相は、米軍基地の沖縄集

中という犠牲で日本の繁栄があることを国民の前にさらした点で功績があった。鳩山前首相の悲劇は、彼とその周辺がオバマ大統領を誤解した点でいう。普天間問題でも、以前の合意を「チェンジ」すると期待した。フラグマティス・トンの例で分かれるとおり、「正しい戦争」という米国の伝統的な価値観に則して行動します。鳩山前首相はそこを読めず失敗し、辺野古への移設で米国の再合意せざるを得なかった。普天間新首相になって、ワシントンの友人に「ほつとした」と言われます。

普首相には、沖縄の負担軽減と共に、日米合意を着実に履行して米国に安心感を与えてほしい。並行して、日本と米国、周辺諸国の前の戦争などを巡る和解の姿勢を打ち出してもらいたい。そこで、東アジアの安定剤となっている米軍基地のある沖縄を生かす。たとえば、次の日中韓首脳会談や北朝鮮核問題の6カ国協議を沖縄で開く。こうした大胆な外交イニシアチフで、「和解の島」沖縄のイメージを構築すべきだ。先日の毎日新聞の世論調査でも、51％が辺野古移設に賛成しました。今がチャンスです。

辺野古移設 実現しない 沖縄を和解の島に

ジャーナリスト・松尾文夫さん



米軍いた方が地域は安定 松尾さん

平和日本に可能な安保を 我部さん

松尾さん 私が期待するのも、そうした情勢安定化です。米朝関係にも、70年代の米中接近のような劇的な変化があり得る。しかし心配なのは、日本が自らの防衛力だけで自国を守ろうと考えることです。核武装論まで行き着きかねず、改めて中国を刺激して、東アジア

全体が不安定化するのではないかと。こうして考えると、沖縄にいても、やはり米軍がいた方が自衛隊だけになるよりいいのでは？ 我部さん そういふ二者択一は違ふと思います。選択肢を先に限定すると、現実もそこに帰結してしまふ。そもそも、日本では国民

の軍事知識が乏しい。それはそれでよかった。だが、国際政治や軍事の専門家ですら、軍事的リアリティーの希薄さが目立つ。これが不幸の始まりで、おかげで上滑りした議論ばかりが続いてきた。防衛政策に合わせて国民の意識を変えるのは、そう簡単ではない。逆に、日本人の平和な意識に合わせた防衛政策を考えるべきではないでしょうか。あくまでも例ですが、日本が従来、内政でも外交でも成功してきたのは、ばらまきです。

ODA(政府開発援助)も国外向きのばらまきといえる。そうした従来の成功例から、日本に可能な周辺地域安定化のための方策、安全保障政策を改めて考えていく視点が必要だと思います。
松尾さん 要するに、沖縄の米軍基地をある種の必要悪とらえて、それを生かす価値観を見いだすべきではないでしょうか。前の戦争を知る最後の世代としては、よくそこまで日米安保とそれによる平和が続いたと思います。次

我部さん 51％の賛成は「自分の地元」に基地が来なければ、どうでもいい」と翻訳できます。これは深刻ですよ。改定から50年たっても、日本人は国民全体で日米安保を支える気がないわけです。日米合意ができただけで喜ぶのは、あまりにも近視眼的です。もう一つ、鳩山前首相の辞任の仕方も大変な問題です。政治と金の問題はさておき、普天間問題で日本人の多くが「米国の意に添わない首相は支持できない。辞めるべきだ」と考えた。日本の民主主義は、首相が米国との関係でクビになるほど不安定だ、と内外に改めて示した。しかも、この現状に「おかしい」と声をあげる人があまりに少ない。要するに、日本の政治には、この国がどこに向かうべきかという戦略的な議論があまりにもない。

松尾さん 51％の賛成に内実がない、との認識には同意します。従来以上に反基地感情が表面化した沖縄と本土の関係修復のためにも、先に述べたような新しい沖縄の役割を示すことが必要だと思う。実現困難な「基地撤去」より、こうした「急がば回れ」的なアイデアをぶつけてみるべきです。
我部さん 日米合意は結局、履行できないでしょう。構造的に障害が多い。従来の自民党政権も「新飛行場の実現は面倒。日米の合意さえできれば十分格好が付く」としてきた。現政権も「合意をしたから話は終わり」と考えているのではないか。次に、沖縄の世論が納得した形を作れない。政府は合意しやすい「地元」を相手としようと、県知事、名護市長など繰り返し交渉相手を変えてきた。その結果、誰かと合意しても別の誰かが反対する構図ができた。つまり、どこかに反対する「地元」を残し

た形での「合意」しかできない。これでは飛行場建設の正当性に疑問が残る。三つ目、今は海兵隊の一部クアム移転と辺野古への移設がセットです。セットにしたことで辺野古を予定通り進めようとしてきた。しかし、今後は逆に、辺野古に足を引っ張られてクアム移転が遅れる可能性が高い。となると、米軍の世界戦略とかかわるクアム移転は、辺野古と切り離さざるを得ない。しかし、クアムが先行すると、海兵隊にとって沖縄に新飛行場を造る意味が本当にあるのかが問われる。

松尾さん 米議会の軍事委員会あたりは、そんな話をしそうです。他方で、朝鮮半島の危機と中国の軍事的膨張に対して抑止力、つまり在日米軍、沖縄の海兵隊が必要とされますが。
我部さん 基地を考えるとき、たとえば普天間飛行場の移設を日本中のすべての米軍基地撤去とごっちゃに論じる傾向がある。普天間や嘉手納といった特定の米軍施設をその軍事的意味を含めて論じること、日米安保全体をどうするかは全くの別問題です。
松尾さん すると我部さんは、米軍の戦略の変化から、少なくとも海兵隊は沖縄から自然に出ていくとお考えですか？
我部さん そう単純にはいきません。海兵隊は既得権として沖縄に飛行場を残したい。しかし、それに戦略的根拠があるかどうか、海兵隊内部でも議論が分かれているでしょう。

だから、中台や朝鮮半島的情勢を安定させて、海兵隊が自然に出やすい環境を作るべきだ。日本外交もその方向で動かないといけない。日本に、単に「追い出す」と言われるほど、米軍は既得権にしがみついています。
我部さん 50年も続いた安定が今後も続くとは考えにくいわけですが、今、日本は曲がり角に来ています。それは誰もが分かっている。ただ、曲がり角の曲がり方によっては、曲がった先でどこに行くのかは誰も考えていない。本当に、戦略的にものを考えるべき時期です。そんなときに基地問題を放置しているようでは、やはりおかしいのです。 — おわり